



**Data**

監督：福澤克雄  
 原作：池井戸潤『七つの会議』（集英社文庫刊）  
 音楽：服部隆之  
 出演：野村萬斎／香川照之／及川光博／片岡愛之助／首尾琢真／藤森慎吾／朝倉あき／岡田浩暉／木下ほうか／吉田羊／土屋太鳳／小泉孝太郎／溝端淳平／春風亭昇太／立川談春／勝村政信／世良公則／鹿賀丈史／橋爪 功／

### ■■ショートコメント■■

◆2005年11月に突如発覚した1級建築士による“耐震強度偽装問題”は建築法制の根幹を揺るがす大問題として日本国中を震撼させたが、今年2018年10月には油圧機器メーカー大手のKYBによる免震・制振オイルダンパーの検査データ改ざん問題が発覚した。改ざんの疑いのある免震・制振装置は全国で987件、計1万928本に上るそうだ。公表された対象物件は官公庁舎が多数あり、原子力発電所や五輪関連施設、空港等もある。そして、未公表物件の3割近くがマンションなどの住居らしい。企業の不正行為はこればかりではなく、2015年の東洋ゴム工業の免震偽装があったし、近時はSUBARU（スバル）の出荷前の完成車検査に関する不正等がある。

それに対して、池井戸潤の原作を映画化した本作では、都内にある中堅メーカー・東京建電とそのネジの下請け会社が結託した“ネジの強度偽装問題”がテーマ。そのネジは航空機や新幹線の座席にも使用されていたから、もしそれらが本来備えるべき強度を保っていないとすれば、人命の危険は・・・？

◆本作冒頭に見る、東京建電の営業会議での北川部長（香川照之）による営業ノルマのかけ方はすごい。というより、これは異常だ。昭和のモーレツ社員の時代ならまだしも、平成が終わろうとしている今、営業ノルマを巡ってこんなハチャメチャなハッパをかける会社は存在しないのでは？まあ、映画だからそれを誇張するのはわかるが、この演出はあまりにあまり・・・。

また、演技する香川照之も、そして北川部長と同期入社ながら今はなぜか「居眠り八角」と呼ばれ、出世競争から完全に脱落してしまった八角民夫（野村萬斎）もキャラが立ちすぎて、過剰演技気味だ。もっとも、実際にストーリーを牽引していくのは、八角からのパ

ワハラ告発で人事部に左遷されてしまった、北川部長の秘蔵っ子だった営業第一課長の坂戸宣彦（片岡愛之助）に代わって新課長に就いた“常識派”の原島万二（及川光博）と、社内不倫に悩むしがらない女事務員・浜本優衣（朝倉あき）だが・・・。

◆かつて“無責任男”で一世を風靡した俳優兼歌手の植木等は「サラリーマンは気楽な稼業ときたもんだ・・・」と歌ったが、現実とは逆で、サラリーマンとは何と辛いもの。本作を見ていると、つくづくそう思ってしまう。出世競争、ゴマすり、社内派閥、取引先接待、社内不倫等々の問題点の他、本作を見ていると、東京建電という1つの会社内部での“営業部と人事部の対立”がこんなにもすごいことにビックリ！

もともと一匹狼の傾向が強い私は、司法試験に合格できたことによってサラリーマンにならずにすんだことを、とにかく感謝！

◆「七つの会議」というタイトルに象徴されるように、やたら“会議”が多いのが日本の会社（組織）の特徴だが、本作に見る「七つの会議」とは一体ナニ？

北大路欣也は今や大企業のトップに君臨する大社長役がピッタリの年齢になっており、本作ラストでは親会社であるゼノックスの代表者としての貫禄を見せつけてくれる。しかし、“御前会議”と称されるその会議での、彼の発言（決済）はあっと驚くものだから、それにも注目！

◆映画としてはイマイチでも、テレビドラマとしては十分面白い本作では、ラストに見る八角の“独白”に注目！石川五右衛門は釜ゆでの刑に処せられるに際して、辞世の句として「石川や 浜の真砂は 尽くるとも 世に盗人の 種は尽きまじ」と詠んだが、八角の“独白”はそれと同趣旨で、日本では会社（組織）の不正は永久に変わらないというものだ。

また、それは、『ハンナ・アーレント』（12年）（『シネマ32』215頁）が教えてくれた、“悪の陳腐さ（凡庸さ）”の教訓と同じ。つまり、人間は弱い存在で、決して正義や倫理に基づいて行動する動物ではない、ということだ。私は全くそれに同感だが、それでは、どうすればいいの・・・？

その“答え”は誰にも見つからないが、私は八角の“独白”のように「××すれば、ひょっとして少しは不正が減るかも・・・？」という程度の考え方に賛成！

2018（平成30）年11月8日記